

第9回 JAT 新人翻訳者コンテスト 英日部門

課題文

アメリカ国立科学財団、物理学分科会の概要

http://assets.jat.org/documents/contests/ninth_jat_contest_new_translators_en-ja_text.pdf

受賞者と最終候補者の訳文

[J10]

概要

物理学は、空の青さ、虹の色、リンゴの落下、月の動きといった私達の身の回りの生活から始まります。これらの現象ではどんなことが起きているのでしょうか。そして、何故こうした働きをするのでしょうか。

物理学は、力、運動、重力、熱、光、電気、磁気、すなわち実際の日常生活に影響する仕組みに関する細部に至るまでの説明を示しながら私達に多くの答えを提供してくれます。

しかしながら、もちろん物理学がそこで終わるというわけではありません。一旦リンゴの落下について疑問が湧くと、もう後戻りができなくなってしまいます。疑問を抱く度に次の疑問が生じ、それは物質、エネルギー、空間、さらには時間に関してまでそれらの神秘を探り出そうとする段階まで続きます。その神秘とは、これらは一体何なのか、実際にどんな働きをするのか、そしてこれらを真に理解する手助けとなる根本的な統一原理はどこに存在するのか、ということです。

これらの疑問に対する答えの探究は、物理学者達を内に向かう長い旅に誘いました。その旅は原子の構造から始まり、それから原子核が持つ強大で危険な力に移り、さらに最近では学者達自身が新たにクォーク、グルオン、レプトンと命名したおびただしい数の「素」粒子まで辿り着いています。

またそうした探究は、学者達を外に向かう長い旅にも誘いました。星の輝き、ブラックホールの反応、銀河の形成、膨張し続ける宇宙などのメカニズムの研究です。そして、今では何とも皮肉なことに、内に向かう旅も外に向かう旅も学者達を同じ場所に導こうとしているように思えます。素粒子の物理法則は宇宙全体、およびビッグ・バンによって137億年前に宇宙が誕生した仕組みと密接に関連していることが明らかになっています。

一方、人類による活用の観点から見ても、物理学は今もなお極めて実用的な学問です。レントゲン装置、ラジオ、レーダー、レーザー、全地球測位システム(GPS)、超電導、MRI スキャンは物理学の研究から生まれた数多くの現代科学技術の一部であり、また固体物理学の基礎研究から生まれたマイクロチップもその中に加えられま

す。さらに今日では、ボース＝アインシュタイン凝縮や量子コンピュータ計算などの分野における研究を通じて、物理学者達はさらに新しい世代の技術の基盤作りを進めています。

アメリカ国立科学財団(以下、NSF)は、大学の個人による研究所から大型粒子加速器に設置された巨大な検出器に至るまでのこれら全ての取り組みにおいて物理学研究を推進してきました。さらにNSFは、エネルギー省をはじめとする各機関と並び、米国内の物理学研究を支援する重要な役割を担っています。そしてNSFは、下記に掲げるこの分野で最大の課題に間もなく取り組むことになる物理学の新しい世代の学生達を支える中心的な存在でもあります。

- ・出現の理解
- ・新量子革命
- ・生命と心の物理法則
- ・究極の統一の探究
- ・宇宙の物理法則

出典元:アメリカ国立科学財団

[J18] 猪原理恵

概要

物理学は、日常における身の回りの物質世界に端を発します。たとえば、空の青さ、虹の色、リンゴの落下、月の動きなど。そこでなにが起きているのでしょうか。なぜこのように動くのでしょうか。

私たちは物理学によって、力、運動、重力、熱、可視光、電気、磁気などの事象を細かく豊かに解き明かし、多くの答えを得てきました。これらの事象の働きによってこそ、日常世界は成り立っています。

もちろん、物理学の内容はそれにとどまりません。リンゴがなぜ落ちるのか、一度疑問に思い始めると後には戻れないものです。ひとつひとつの疑問が次の疑問を呼び、気が付くと最終的には、物質において最大の不可解な神秘である、エネルギー、空間、時間そのものまで探ってしまうのです。これらの正体とは。実際はどう動いているのでしょうか。そして、これらを根本的に理解する手がかりとなる、難解な統一原理はどこにあるのでしょうか。

これらの問いへの答えを求め、物理学者たちは内なる次元への探究を長い時間重ねてきました。最初は原子の構造について、次に原子核中の強くて危険な力について。最近では、クォーク、グルーオン、レプトンなどの名をもち、おびただしく並ぶ"亜原子"粒子を対象にしています。また同じく答えを追求し、物理学者たちは外の次元への探究も長い時間行ってきました。この研究には、恒星が輝く仕組み、ブラックホールの働き、銀河の形成方法、宇宙が広がっていく仕組みについてのものがあります。そして現在、何とも矛盾するようですが、物理学者たち

の内への探究と外への探究は、同じ場所に向かっているようです。最小である素粒子に関する物理学が、宇宙全体、そして約 137 億年前にビッグバンがすべての存在をつくった仕組みと、密接に関連していることがわかったのです。

再び人間の次元に話を戻すと、物理学はこれまで、非常に実用的な性質をもつ科学として活用されてきました。物理学研究から登場した現在の多くの科学技術の中には、X線機器、無線機、レーダー、レーザー、GPS、超電動、MRI 検査などがあり、固体物理学の基礎研究からもマイクロチップがうまれました。さらに今日、物理学者たちはボーズ・アインシュタイン凝縮や量子計算などの分野での活動をとおり、さらに新しい時代の科学技術の土台作りに取り組んでいます。

アメリカ国立科学財団(NSF)では物理学のこれらすべての挑戦を、大学の個人研究室から巨大な粒子加速器での大々的な検出の規模にいたるまで支援してきました。事実、アメリカ国立科学財団は、エネルギー省のような機関とならんで、国内の物理学研究を補助する主要な資金源のひとつです。また、物理学を学ぶ若い世代を援助する大きな資金源でもあります。この世代は近い将来、下記の物理学最大の課題に取り組む一員となるでしょう。

- 創発の解明
- 新たな量子革命
- 生命と精神に関する物理学
- 究極の統一性の探究
- 宇宙に関する物理学

提供:アメリカ国立科学財団

[J45] Kenichi Matsuura

概要

物理学は、身の回りのありふれた物質世界から始まる。空の青さ、虹の色彩、リンゴの落下、月の動き。いったい何が起きているのか？なぜこのようになるのか？

我々は、物理学によって多くの答えを得ることができる。実際に日常の世界を引き起こす仕組みである力、運動、引力、熱、光、電気、磁気などを非常に詳細に説明することもできるのだ。

しかし、もちろん物理学はそこで終わるわけではない。いったんリンゴが落下する不思議さに興味を持てば、もう後には戻れない。疑問は次から次へと沸き起こり、最終的に物質、エネルギー、空間、そして時間そのものの神秘に迫るまで続く。それらは何なのか？本当はどのように作用しているのか？そして、我々がそれらを真に理解する助けとなる深い統一原理はどこにあるのか？

物理学者は、これらの疑問を解決すべく探究し、言わば内部への長い旅を続けてきた。始めは原子の構造を、そして原子核内の強力な力で危険な力を、さらに最近ではクォーク、グルーオン、そしてレプトンと名付けられた亜原子粒子の目の回るような配列に至る旅である。また、その探究は物理学者たちを外部への旅へも誘ってきた。それは、星の輝き方やブラックホール作用、銀河の形成、そして宇宙の膨張の研究に至る旅である。そして現在、大変皮肉なことではあるが、この内部と外部の相反する方向へ向かったはずの旅が、どうやら物理学者たちを同じ場所へと導いてきたようである。最も小さな粒子の物理学が、全体としての宇宙と、ビッグバンが約137億年前にそれらの粒子全部をどのようにもたらしたかということと密接に絡み合ったものであることが判明したのである。

一方、話を人類の尺度に戻せば、物理学は依然として著しく実用的な科学であり続けている。物理研究を基に開発された現代科学技術には、X線撮影装置、ラジオ、レーダー、レーザー、全地球測位システム、超電導、MRIスキャンなどがあり、固体物理学の基礎研究を通じてマイクロチップが生まれた。さらに今日では、ボース＝アインシュタイン凝縮や量子化計算のような分野の研究を通じて、物理学者たちはより新しい世代の科学技術の基礎を築いているのである。全米科学財団(NSF)は、大学の個人実験室から粒子加速装置の大規模な検出器にいたるまで、物理学における全ての試みを支え、育ててきた。それにまた、NSFはエネルギー省などと共に、全米の物理研究の支援に携わっている主要な機関の1つである。そして、物理を学ぶ青年たちを支援する主要機関でもある。彼ら次世代の若者たちも、まもなくこの分野における最も偉大な挑戦に着手し、研究に加わるようになるであろう。

- 創発性の理解
- 新たな量子革命
- 生命と心の物理学
- 究極の単位の探究
- 宇宙物理学

課題分提供協力:全米科学財団

[J48] Masae Yamamoto

概要

物理学は私たちの周りにある日常の自然界、例えば空の青さや虹の色、りんごの落下、月の動きなどから始まります。どのような現象が起きて、なぜそのような働きをするのか。

物理学は私たちが抱く問いに対して、エネルギーや運動、重力、熱、光、電磁気などの諸現象に関する幅広く詳細な説明とともに、多くの答えを与えてくれます。その答えが、自然界を実際に作り出している仕組みなのです。

しかし、物理学は答えが出たら終わるものではありません。林檎の落下について一度調べ始めたら、もう引き返すことはできません。どの疑問も次の疑問へとつながっていき、物質やエネルギー、空間ひいては時間という壮

大な神秘を追究している自分に気付くことになるのです。どんなもので、本当はどのように機能するのか。正しく理解するための、根本となる普遍的な法則はどこにあるのか。

問いかけに対する答えの探究は、物理学者たちを物質の内側に向かう長い旅へと導いてくれました。最初の旅は原子の構造、次は原子核の中にある強力で危険なエネルギー、最近ではクォークやグルオン、レプトンなどと物理学者によって名付けられた、途方もなく多様な亜原子粒子につながる旅路でした。また、星の輝きやブラックホールの動き、銀河の形、宇宙の広がりといった物質の外側に向かう旅へも導いてくれました。そして今は、なんとも皮肉なことですが、内側への旅でも外側への旅でもたどり着く先は同じ場所のようです。素粒子物理学と宇宙全体、そして137億年前のビッグバンにより宇宙が誕生した経緯が密接に関連することが判明しています。

さて、人間社会の中での物理学といえば、極めて実用的な科学として存在し続けています。現代における多くの科学技術の中で物理学研究から生み出されたものには、レントゲン装置やラジオ、電波探知機、レーザー、GPS（全地球位置発見システム）、超伝導、MRI（磁気共鳴画像法）スキャンがあります。また、固体物理学の基礎研究から生み出された成果として、電子マイクロチップがあります。さらに最近では、ボース＝アインシュタイン凝縮や量子計算分野の研究を通して、物理学者たちが次世代より先の科学技術に向けた基盤を築いています。

大学内の個人研究室から大型粒子加速器に設置された大型粒子検出器に至るまで、アメリカ国立科学財団はあらゆる研究活動における物理学を助成してきました。当財団は、エネルギー省などの省庁に並び、米国内の物理学研究に対する支援を行う主要機関の一つです。また、物理学を学ぶ若い世代、次のような物理学における最大の難問への挑戦に加わっていくような若い世代の支援を行っています。

- 創発論
- 量子革命
- 生命と精神の物理学
- 素粒子の探究
- 宇宙物理学

第2位 [J51] 山田慎太郎

概要

物理学の始まりは大抵身近な日常の世界にあります。空の青さ、虹の色、りんごの落下、月の動きなどに対し、何が起きているのか、なぜこんな風になるのかと、疑問を持つことから始まるのです。

それから、力、運動、重力、熱、光、電気、磁気に関する詳細かつ貴重な記述とともに、日常世界で起こる事象の仕組みについて、物理学は私たちに多くの答えを提示してくれます。

しかし、もちろん、そこで終わりではありません。りんごが木から落ちることについて問い始めると、もう後には引けないからです。一つの質問がまた次の質問を呼び、気付けば、物質やエネルギー、宇宙、さらには時間そのものについての最大の秘密を探っていることでしょう。一体それらは何なのか？実際はどういう仕組みになっているのか？私たちを真の理解へと導く統一原理はどこにあるのか？

こういった問題を究明するため、長きに渡って物理学者はマイクロレベルで真理の探求を行ってきました。最初は原子の構造に始まり、続いて強力かつ危険な原子核の力へ。さらに、後にはクォーク、グルーオン、レプトンと命名された非常に種々多様な亜原子粒子も研究の対象となっています。また、星の光、ブラックホールの仕組み、銀河の形成、宇宙の拡張などの研究のように、マクロレベルにおいても物理学者は真理を目指して長い旅路に就いてきました。そして今、皮肉なことに、マイクロレベルとマクロレベルにおいて物理学者は同じ場所へ導かれているようです。それを証明するかのように、極小粒子の物理学は宇宙全体と密接に絡み合っており、約137億年前に起こったビッグバンによる宇宙誕生の秘密に関係していることが判明しました。

一方、人間レベルの話に戻すと、物理学は極めて実用的な科学分野であることに今でも変わりはありません。物理学の研究から生まれた数多くの現代テクノロジーの中には、X線装置、ラジオ、レーダー、レーザー、GPS（全地球位置把握システム）、超伝導、MRI スキャン（磁気共鳴映像法スキャン）などが含まれており、固体物理学の基礎研究によって開発されたマイクロチップもその一例です。さらに、今日では物理学者によってボーズ・アインシュタイン凝縮体や量子計算の分野で研究が行われているため、さらに新世代のテクノロジーを生み出す土台作りが進められています。

アメリカ国立科学財団（NSF）は物理学を推進し、こういったテクノロジーの発展に尽力してきました。大学における個々の研究室から粒子加速器の巨大検出器まで、NSFの恩恵は至る所で見受けられます。NSFは、エネルギー省と共に、アメリカの物理学研究に対する大きな支援機関の一つであることは間違いありません。そして、次世代を担う物理学の学生にとっても、NSFは大きな支えなのです。そんな彼らが直に取り組み始める物理学における大きな挑戦には以下のようなものがあります。

- 創発の理解
- 新たな量子革命
- 生命と心の物理学
- 究極の統一の探求
- 宇宙の物理学

アメリカ国立科学財団の好意により

第1位 [J24] Chiaki Matsumoto/松本千秋

概要

物理学は私たちを取り巻く日常の物質世界に端を発しています。例えば、空の青さ、虹を彩る色、木から落ちるりんご、月の動きなども物理学に関わるものです。これはいったい何が起きているのだろうか？なぜ物事がこのように機能するのだろうか？

こんな疑問に対する答えをたくさん導き出し続けるのが物理学です。力、運動、重力、熱、光、電気や磁気など物質の示す性質の根拠、すなわち日常社会で実際に起きている物事の仕組みを詳細に追及し、その根拠を解き明かしてくれるのです。

もちろん物理学はそれだけで済むものではありません。一旦りんごが落ちる理由を疑問に持ち始めたら、もう後戻りすることはできないのです。それぞれの疑問が更に次の疑問を生み続けます。物質、エネルギー、宇宙、果ては時間そのものまで、その根底にある秘密を解き明かすことができるまで、疑問が途絶えることはないのです。これはいったい何だろう？実際にどのように機能するのだろうか？そしてこれを本当に理解するために役立つ統一原理はどこに潜んでいるのだろうか？

このような疑問に対する答えを探求するため、物理学者たちは内部へ向かって長い研究の道のりを歩んできました。まずは原子構造についての研究、次に原子核内にある強力なエネルギーについての研究、最近ではクォーク、グルーオン、レプトンなどと命名された「原子より小さな」粒子についての研究が次々となされています。また、この探究のために物理学者たちは外部へ向けても長い研究の道のりを歩んできました。まず星はどのようにして輝くのか、ブラックホールはどのように活動するのか、そして銀河はどのように形作られるのか、ひいては宇宙がどのように拡張しているのか、といった研究です。そして今、なんとも皮肉なことこの内部へ向けた研究の道と外部へ向けた研究の道が、1つの同じ場所へと物理学者を導いているようなのです。最も小さな粒子の物理的性質が、実は宇宙全体のしくみや 137 億年前のビッグバンで宇宙がどのように誕生したのかという問題と密接に結びついていることが判明したのです。

人間レベルに話を戻すと、物理学は引き続き極めて実用的な科学分野となっています。物理学研究から生まれた数多くの現代科学技術には、X線機器、無線通信、レーダー、レーザー、全地球測位システム(GPS)、超電導、MRI スキャンなどがあります。そして固体物理学の基礎的研究を通して生まれた技術としてマイクロチップが挙げられます。更に今日では、物理学者たちはボース・アインシュタイン凝縮や量子計算などの研究を通じて、次に続く新世代技術を生み出すための基盤づくりを行っています。

アメリカ国立科学財団(NSF)では、大学の各研究室から大型粒子加速器に付随する巨大検出器まで、あらゆるレベルでの物理学研究に対する助成活動を行っています。実に、エネルギー省のような政府機関と並んで、NSFはアメリカにおける物理学研究を支援する立役者の1つとなっています。また、NSFは物理学を学ぶ若い世代の学生たちを支援する上でも主要な役割を果たしています。この若者たちの世代は、物理学の中でも最も難解を極める以下のような問題にやがて果敢に取り組んでいくことになるでしょう。

- 創発の理解
- 新量子革命
- 生命と心の物理学
- 超大統一理論の探究
- 宇宙の物理学

提供:アメリカ国立科学財団

審査員講評

- ★ 第9回コンテストは、英日・日英の各部門とも先着50名のみを受け付けるという、応募者にとって厳しい時間制限を課した上で実施されたものです。

藤村聖志

全体講評

今回の課題文は物理学関係のエッセイみたいなものだったのですが、英文それ自体はさほど難解ではなく、むしろ、簡潔で素直な構文で構成された内容でした。物理学と聞いてちょっと身構えた人もいたかもしれませんが、本課題文では、物理学に対する造詣を試されるというよりも、こういう少し毛色の変った内容の原文をいかに解りやすく一般の読者に伝えることができるかという技量が問われています。あくまでも翻訳ですから、読んで解りにくかったら失格です。解りやすい訳文を書くためには、最低限の教養と粘り強い調査力が必要です。原文が何を伝えようとしているかをまず翻訳者が十分理解している必要があり、自分は物理学が苦手だからといって、適当な訳でお茶を濁しているようでは、将来プロになるのは難しいといわざるを得ません。

私を含め三人の審査員で最終審査を行ったわけですが、他のお二人の審査員からは、去年と比べるとファイナリストの力量が劣っているという、厳しいご意見がありました。私は、今回の応募訳が格別悪かったとまでは言いませんが、難解な構文がなかった分、解釈した原文内容を表現する段階で、多くの方が未熟な表現で失敗しているのが気になりました。具体的にいうと、physics や work という基本的な単語の持つ広がり把握できていない例が多く見受けられました。私たち翻訳者も含めて辞書で単語を調べるのは必須作業ですが、高校・大学時代と違って、実際の翻訳現場では、すべて辞書で片が付くことは、まずあり得ません。多くの意味を持つ基本的な単語は、必ず文脈の中で理解し、生きた使える単語として身に付けることが必要です。訳文としての日本文についても同じことが言えます。稚拙な日本文を書いてしまうのは、まともな日本文が使えていないということです。辞書やインターネットで手に負えないならどうすれば良いのか—そう聞きたい方もいらっしゃるでしょう。良い英文、良い日本文を沢山読んでください。情報収集手段には事欠かない時代ですが、最終的に翻訳の質を決めるのは皆さんの頭の中に蓄積された生きた情報です。

個別講評

J24

それでは、個別講評に移りたいと思います。まず、J24 さんですが、一番よかったのは、原文の流れに逆らわずに素直に翻訳しようという姿勢がうかがえたところです。翻訳が正確であることは最低必要条件ですが、日本語と全く構造の違った英語の内容を綺麗な日本語で表現できるかという点が翻訳者の腕の見せ所です。しかし、これには落とし穴があって、ともすれば、余計な言葉を付け足したり勝手に原文内容を改変したりして、見た目だけは上手な日本語訳を書いてしまうことがあります。J24 さんは、そういった失敗をせず、誤訳の少ない素直な日本語に仕上げられました。特によかったのは、第二段落の Physics goes on to give us many answers—along with... の同格表現の処理で、「..すなわち日常社会で..」と、うまくつないで原文の流れを壊さずに訳されています。他の方々とはここが決定的に違いました。

今後の課題は、もっと洗練された日本語を書くことでしょう。例えば第二段落の Physics goes on to give us many answers に対し「こんな疑問に対する答えをたくさん導き出し続ける..」とされていますが、「こんな疑問に対してどんどん答えてくれる..」くらいの訳ができれば本物です。正確に解釈する作業はほぼできているので、「答えをたくさん導き出し続ける..」というような堅苦しい、冗長な表現に満足しないで、物理学のありがたさをもっと分かりやすく、簡潔に表現する工夫をしてください。同段落の「物質の示す性質の根拠」に続く訳文も、全体的に説明調になっています。「..など、日常世界の諸現象を生み出すメカニズムを詳細に解き明かしてくれる..」くらいに絞れると思います。書き過ぎは良くありません。翻訳者は創作する側ではないので、なるべく訳文をシンプルに仕上げるようにしましょう。

J51

J51 さんの訳文は、リズム感があって、読みやすさでは一番だと思います。和文の表現力だけをとれば、一位の J24 さんよりは上だと感じました。実際、最初は J51 さんを一位にしていたのですが、読みやすさを意識しすぎたのか、余計な付け足しがところどころ見受けられたので、二位としました。

第4段落の「それを証明するかのよう」という語句は全く不要で、J24 さんのように、「..ことが判明したので」と少し強調形にしてやると、「..同じ場所に導かれている」ことの証明のニュアンスを出すこともできます。第六段落の「こういったテクノロジーの発展に尽力」「NSFの恩恵」も、あれこれ詰め込み過ぎですね。nurtured をどういう風に訳に反映するか四苦八苦した結果だと推測しますが、J24 さんは、「助成活動」という言葉を使ってすっきりと仕上げています。最初に述べましたが、こういった基本的な語句の中心的な意味(この場合は「助けて育てる」)をしっかりとつかんで、簡潔に表現することが大切です。また、前後しますが、第4段落の「極小粒子の物理学は..絡み合っており」はちょっと不自然ですね。粒子の物理的性質ないし振舞が宇宙全体と絡み合うということであって、physics を何が何でも「物理学」と訳して疑わないのはよくありません。

文章を書き慣れている方ですので、逆に、書き過ぎや筆すべりに注意してください。いったん訳文が仕上がったら、もっとスリムにならないか検討する癖を付けることをお勧めします。

J48

J48 さんも、大体うまくまとめているのですが、第二段落の「その答えが..仕組みなのです」がまずかったですね。mechanism は詳細に説明される要素の一つであって、物理学の対象であり、答えではありません。また、第三段落の「どんなもので、本当はどのように機能するのか」という文は、少し不親切ですね。ここは素直に「それ

ら」という主語を入れたほうが良いでしょう。物質やエネルギーといったものの神秘を追及する行為を受けているわけですから、せめて、「その正体は？」くらいにしないと、文の流れが途切れてしまいます。ちなみに、物質、エネルギー、時間といった大きな実体や現象に対して「機能する」という表現は意味が狭すぎて不似合いです。「機能」というのは、装置や仕掛けがその能力を発揮するような、もっと限定された場面で使う言葉で、この場合、「働く」や「仕組み」のようなより広い意味合いを持つ言葉を選択するべきでしょう。work という単語は確かに便利ではあるが訳しにくい単語で、文脈の中に活かして訳出するように心掛けてください。それと、第5段落の「電子マイクロチップ」は「マイクロチップ」で十分です。マイクロチップというのは電子で駆動するものと決まっていますから。

なんだか小言ばかりになってしまいましたが、一、二位と比べてさほど差があるわけではありません。もっと読む側を意識して丁寧に仕上げているのであれば入賞していたのに、惜しかったですね。

J45

J45さんは、簡潔で力強い文体に仕上げられていますね。その姿勢は悪くありません。でも、第二段落は強引に行きすぎて失敗しています。J48の講評でも言ったとおり、mechanism は詳細に説明される要素の一つです。なんだか勢い任せに訳してしまった雰囲気がありますね。...and mechanism: the mechanism that...という形は、「・・仕組みである力、運動・・」と訳出するには無理があります。第四段落の「ビッグバンが・・粒子全部をどのようにもたらしたか・・」は、誤訳といってもおかしくありません。ビッグバンがもたらしたのは(ビッグバンによって膨張し続ける)宇宙です。it の直前にあるのは universe ですし、「粒子全部」をもたらしたなら brought them となっているはずですが、ここらへんは、少し注意すればわかるはずですが、ちょっと綿密さが足りませんね。第三段落の「言わば」とか、第五段落の「それにまた」等は不要な言葉です。試しに訳文から削ってみてください。特に影響はないはずですが、削ってもたいして影響がないということは、不要な付け足しだということです。訳文を書く前に、じっくり頭を捻って日本語を出し惜しみしてください。そのほうが良い結果が出ます。

J10

J10さんは、第三段落の「その神秘とは、・・ということです」の部分が、致命傷でした。原文では、What are they? How do they really work?と、たたくみかけているのに、こういう説明口調にははいけません。問いかけの行為が神秘というもおかしいですよ。第四段落の「素」粒子は、「」の必要がないし、subatomic particles を単に素粒子としては不正確です。他の方々「亜原子粒子」と訳されていますが、要するに、原子を構成するより小さな粒子というニュアンスをはっきり伝えなければなりません。

全体として訳文自体はそれほど悪くないのですが、英文解釈の段階でまだ甘さが目立ちますので、きっちりとした解釈を心掛けてください。

J18

J18さんは、用語の選択にもっと神経を使ってください。第一段落の「なぜこのように動くのでしょうか」は、あまりに漠然としていますね。第二段落で light を可視光としていますが、可視光は光のほんの一部分であって、わざわざ可視光とする必要はありません。第三段落「不可解な神秘」は、変だと思いませんか？不可解だから神秘というのであって、「危険なリスク」といった例のような、素人っぽいミスの類です。「難解な統一原理」も、あとに続く文が that can help us truly understand であることを考えると、「難解な」原理が理解を助けるという変な構図になりますよね。ここでの deep の意味は、むしろ「深く広がりがある」といった肯定的な意味で、「薄っぺらで浅はか」な理屈ではありませんよと、言いたいわけです。簡単な単語に以外と足をすくわれますので、気をつけ

てください。第四段落の「内なる次元」は、いかにもどこかで聞いたようなフレーズですが、ここでは、物質世界の内なる世界への旅をさす表現ですから、精神世界か物質世界かよくわからない「次元」という言葉よりも、「物質の内側」などとはっきり言いきったほうが良いと思います。「また同じく答えを追及し・・・」という語句も邪魔で、少し工夫して、こういう冗長なつなぎ言葉を無くす努力をしてほしかったですね。

文句が多くなってすいません。せつかくがんばって訳文を提出されたのですから添削のまねごとでもしてあげようと思ったところが、少し口数が多くなってしまいました。とんでもない誤訳はありませんし、努力すれば、一位の人だってすぐ追い抜けますよ。ただ、辞書に載っている訳をちよいと拝借という、安易なやり方は避けてください。訳語を使う前に、本当にこの訳語がこの文脈で生きてくるのかと、疑ってください。そして、何よりも、良い本を沢山読んで、言葉の引き出しをどんどん増やしてくださいね。

将来プロの翻訳を目指される方へ

皆さん将来プロの翻訳家を目指されていると思いますが、実際の翻訳現場では、クライアント(読者)が満足する翻訳を提供しなければなりません。自分がこれだけ調べて正確に訳したと主張しても、読む側に、わかりにくい、不正確だといわれればそれまでです。もっと言うと、原稿のできがすこぶる悪かったとしても、原稿作成者の意図をなんとか汲み取って訳してあげるくらいの、サービス精神が必要です。そのためには、原文解釈に毛が生えた程度の訳文で満足してはいけません。原文解釈は頭の中ですませて、原文が伝える情報を新たに表現し直すくらいの気構えを持ってください。そのためには、辞書やインターネットに頼り切るのではなく、普段から、英語・日本語の貯金を殖やす努力が必要です。単語は文脈の中で生きてきますから、どんどん本を読んで、生きた表現を身に付けることが肝心です。読んだ内容の大半を忘れても構いません。後に残ったわずかな収穫が、後々思わぬところで役に立ちます。この仕事は特に見入りが良いというほどのものでもありませんので、酔狂にも翻訳者になりたいという人は、きっと、言葉の世界にどっぷりと浸って悦に入るようなタイプだと推察しますが、「好きこそ物の上手なれ」という格言にあるように、翻訳者になって楽しく苦しんでください。

千樹靖

第1章「物理?いやあん! 苦手!」で応募しなかった皆さんへ

応募しなかった人は多分これを読まないのを書いて意味ないかもしれませんが…。翻訳を勉強している皆さんは、専門分野を確立するようにアドバイスを受けて、それぞれ専門分野を決めて日夜がんばっておられると思います。そんなところに水を差すようで申し訳ありませんが、プロとして活動しだすと、「XXが専門です」は頼もしいですが「XXしかできません」ではちょっと食べていけなかつたりするわけです。また金融を専門にしても、技術系企業の資料や市場予測なんかの翻訳も回ってくるわけで、そうなると金融翻訳者になっても、金融50%物理50%の内容を翻訳する場合もあるわけです。というわけで、「アマチュアの間恥はかき捨て」ということわざもあることですし(ない?)、プロになるまでは、専門性を追求すると同時に、いろんな分野を「つまみ食い」することもお勧めしたいと思います。その点、こういうコンテストは通常勉強していない分野の翻訳にチャレンジするいい機会になるかもしれません。来年の課題はまだ決まっていますが、自分の専門以外の分野であっても応募を

検討してみたいかがでしょうか。

第2章 いきなりきついことを言うようで恐縮ですが...

毎年言っていますが、予選を突破して1位2位を争う皆さんの翻訳は、さすがに英文解釈の点では大きな差はつきません。したがって、本選ではどうしても日本語のアウトプットの勝負になってきます。私は毎年、変な日本語撲滅キャンペーンを行っており、昨年はかなり改善されてレベルの高いコンテストになり喜んでいましたが、残念ながらこの点では今年は少し後退してしまったようです。今回1位になった方も、日本語表現にはまだまだ改善の余地があります。ご褒美のハワイJETでは、先輩翻訳者との交流で日本語表現を磨くヒントを掴んで頂きたいと思います。確かに今回のテキストは、訳しにくい(直訳が work しない)フレーズが多かったように思います。今回のポイントは、「HUNTER×HUNTER」風に言えば、「コオウ×ト×コウカ」です。そのあたり、以降の章で考えていきたいと思います。それでは、いつものように共通の問題点からです。

第3章 つかみ(翻訳そのものとはちょっとずれる話題で恐縮ですが...)

「ああ神様！お腹の子の父親はいったい誰なのでしょう？」と侯爵夫人は言いました...

さて、皆さん、この物語の続きが読みたくなりましたか？この文章は、アメリカの小話の一節です。小説講座の先生が、読者を読む気にさせるには、なるべく早い段階で宗教、セックス、ミステリー、そして上流階級覗き趣味(「家政婦は見た！」みたいな...)の4つの要素を入れましょうと生徒に教えました。するとある生徒が冒頭の1文ですべての要素を入れてみせたわけです。「ああ神様！(宗教)お腹の子の父親(セックス)はいったい誰なのでしょう(ミステリー)？」と侯爵夫人(上流階級覗き趣味)は言いました。」というわけです。極端な例ですがこれが「つかみ」(漫才用語で失礼します)です。

まあ、ここまで読めば何が言いたいかはだいたいおわかりかと思えます。今回のテキストは、NSFのウェブサイトのトップページのテキストですね。テキストの内容は、簡単に言ってしまうと、それこそ「物理？いやあん！苦手！」という読者に「物理学は、そんなに小難しいもんやおまへんで。皆さんの日々の生活でも役に立ってまっさかいいに、物理学とNSFをヨ・ロ・ピ・ク・ネ」と呼びかけるものであり、ウェブサイト全体を読んでもらうためのまさにつかみの役目を果たす文章です。そしてその冒頭の文は、つかみのつかみにあたるわけですから、侯爵夫人をもち出す必要はありませんが、少しは読者を読む気にさせるための工夫も必要です。産業翻訳でそこまで考慮する必要があるのかと思われるかもしれませんが、産業翻訳といっても、リーガル翻訳やパテント翻訳などの固い文章だけではなく、企業のパンフレットの2ページ目や(3ページ目もそうかも)、ウェブサイトの表紙や見出し、キャンペーン資料、フォーラムや見本市などの宣伝資料、メーカーが販売代理店に行うプレゼン資料など、つかみがあった方が望ましい翻訳テキストは結構あります。つかみとまではいなくても、最初の1文を非常に読みづらい文にしない配慮は必要です。また、翻訳とは、「意味を別の言語で正確に再生する」ことですが、「文章が読者に与える効果を別の言語でも再生する」ことが求められる場合もあります。すなわち、英語の文章を読んで読者が笑ったら、その翻訳文でも読者が笑うことが望ましいわけですね。この場合だと、英語の文章を読んで読者が続きを読みたいと思ったら、翻訳文でも読者に続きを読みたいと思わせることが望ましいわけですね。長々と書きましたが、こういうわけで今回の課題文でもつかみがあった方がいいかも、と納得して頂けたら、

その観点から皆さんの最初の文をみてみましょう。まず、begin with の呼応が読みづらい(第5章第1項参照)。また4つの事例でも「青空」と「リンゴ」はともかく、他の2例の訳は物理現象の疑問をわかりやすく紹介する効果は薄いように感じます。これは、翻訳の善し悪しだけでなく、単純なフレーズを同じような単純なフレーズに翻訳する場合の言語の限界もあります。例えば、colors の複数の s は、日本語ではどっかの梅酒のように「さりりと」は表現できません。今回は、(複数の意味をなんとか短く表現しようと苦戦された結果なのか)「虹を彩る色」や「虹の色彩」等の「不思議系？」の超訳でコンテストを「彩って」頂きました。というわけで、残念ながらつかみのある文章とは言えないようです。

では、どうすればよいか？これは、常に読みやすい文章を心がけて、特に冒頭の文は注意して訳するという原則を守る以外はケースバイケースで考えていくしかありません。ただ、今回皆さん全員があまりにも同じようなアプローチなので、天の邪鬼の審査員としては、少し違うアプローチの例を提示したいと思います。まず、伯爵夫人の文に倣って、直接疑問文を文頭にもってきます。この場合に英語と同じ効果を出しにくい4つの事例を疑問文にしてしまいましたが、4つ並べるとやかましいので、「1色 VS 多色」組と「落ちる VS 落ちない」組の2組にまとめます。こうすることで「colors」の s も訳出できますし、4つの事例が物理現象であることもより明確になります。するとこんな感じになります。

「どうして空は青一色に見えるのに、虹は何色にも見えるのだろうか？どうしてリンゴは落ちるのに、月は落ちてこないのだろうか？こんな身の回りの疑問から物理学は始まります。」

もちろんこれが best solution というわけではありませんが、直接疑問文で文章を始めることで少しは「つかみ効果」がでるかもしれません。

第4章 直接疑問文

What's happening here? Why do things work this way? What are they? How do they really work?

今回上記のような直接疑問文があり、全て簡単な単語で単純な質問ばかりになっています。皆さんも、原文でこれらの直接疑問文が効果的に使用されているのは理解しておられると思いますが、その効果を日本語で再現するのに大変苦戦されていたようです。この問題は、周辺の文体や構成とのからみもありますし、一概にこうするのが正解/不正解、適切/不適切とはいえません。また、間接疑問文や普通の文に変えてしまうと言うソリューションも考えられます。1つ言えるのは原文の意味だけでなく、3章で述べた原文が持つ「効果の再生」も考え合わせて、対応していくしかありません。

第5章 呼応！呼応！呼応！

今回、いろんな意味で呼応の悪さが目立っています。主語と述語以外にもいろいろな呼応があります。斬新な呼応は読んでいて楽しい場合もありますが、産業翻訳では極力一般的な呼応を使う方が無難です。

第1項 begins with

「生活/物質世界から始まります。」「物質世界に端を発しています」

OKと感じる方もいるかもしれませんが、呼応が弱いです。日本語では「から始まる」のは「world」そのものではなく「worldの疑問」です。「疑問」は原文にありませんと言われるかもしれませんが、次の直接疑問文まで読むとここに「疑問」が隠れていることがわかります。「物理学は、XXの(ささいな)疑問から始まる/に端を発する」とすると日本語として呼応が強くなり、一気に読みやすくなります。

第2項 「work」の翻訳が work していません。

Why do things work this way?

この文章の前には4つの例があがっています。「things=空、虹、リンゴ、月」、「work = 青い、いろいろな色に見える、落ちる、動く」ですね。ここで「青い、いろいろな色に見える、落ちる、動く」に呼応する言葉として「働き/動く/機能」が work しているのでしょうか？

How do they really work?

この work の主語は、「物質、エネルギー、宇宙、時間」ですね。それらに対して、「動いている/機能する/作用している」は呼応しているのでしょうか？

第3項 black holes behave SVの呼応

「ブラックホールの反応/働き/作用」は呼応していますか？
(「働き」は文脈によってはOKの場合もあるかもしれません)

その他の呼応の問題は、個人別の章でとりあげています。

第6章 強調の itself

matter, energy, space—even time itself.

ここで itself を「そのもの」と訳しておられる方が数名いました。

「A、B、Cさらには/果ては/そして/D そのもの」と訳すと、A、B、Cは、Dに付随/関連するものということが imply されます。ここではA、B、C、Dは別物ですから「そのもの」は不要です。itself は強調なので、「さらには/果ては」等で訳出できていると思います。

第7章 long journey inward→long journey outward→destination は同じだったという山手線的「オチ」 →Back on the human scale

皆さん、この流れがわかっていながら、なかなか上手い表現が浮かばなかったようです。原文は、「journey」というモチーフを上手くつなげて、物理学の守備範囲の広さを視覚的にイメージさせて、読者をわくわくさせる「効果」を出すことに成功しています。読者は、科学博物館に行って、最初に「マイクロ・ナノの世界」の展示を見て、次に「広大な宇宙の世界」の展示を見て、最後に「私たちの住む世界」の展示を見て、博物館特製ソフトクリームをなめて家に帰る、みたいなイメージを抱きながら読むかもしれません。今回は、この原文の「効果」を再現できていないというだけでは減点の対象にしていますが、「内/外」という直訳だけでは抽象的過ぎます。今回は、「何の

内/外か」を読者に明示していない翻訳は、日本語として表現が完結していないという観点で減点対象にしています。しかし、「内/外」共に適用できる「何の」に相当する日本語はなかなかないと思います。「物質の内側/外側」とされている人がいましたが「物質の内側」は OK と思いますが、「物質の外側」というとどうしても「物質の表面」の意味で使用されることが多いように思います。この点、J51 さんは「内/外」という直訳を避けていました。これも 1 つのソリューションですね。「human scale」の訳語は、「inward/outward」の訳語にできれば呼応させたいところですが、それは今後の宿題ということにしましたが、意味がわかりづらいと言う観点で、J48 さん以外の皆さんを減点しています。

第 8 章 文章の主体を忘れた表現

この文章を書いているのはもちろん NSF ですが、それを忘れたような表現が散見されます。自己紹介する文章で、「事実～資金源のひとつです。」「実に～立役者の 1 つとなっています。」「NSF の恩恵は至る所で見受けられます。」「大きな資金源」は、「どんだけ強気やねん/上から目線」的な印象を与えてしまう表現です。企業や組織が自らをアピールする文章はウェブにいくらでもサンプルがあるので、これを機会に研究されておくことをお勧めします。

第 9 章 交通整理

「rising generation of students in physics—the generation ~on the field’s greatest challenges」
皆さん直訳した後の交通整理ができていないようで、冗長で読みにくくなっています。いろんなアプローチがありますが、例えば、「～の卵たち」「活躍が期待される～」みたいなフレーズを使えばもう少し短く読みやすくなるかと思います。

第 10 章 個別コメント

ここからは個人別のコメントです。

J10

1)「これらの現象ではどんなことが起きているのでしょうか」

一見問題ないようですが、不思議表現です。「どんなことが起きているのでしょうか？」→「これらの現象」と自問自答してしまっています。この文脈の翻訳で適するかどうかは別にして通常は「どんな現象が起きているのでしょうか」が一般的な表現になると思います。

2)「影響する」

「give rise to」の訳としては弱すぎます。

3)「ということです。」

このフレーズの呼応元つまり、「XX は YY ということです」の「XX」がありません。

又この段落は、やや冗長です。

4)「学者達自身」

「自身」と強調する必要があるでしょうか？

5)「その中に加えられます。」

とってつけたような印象があります。

6)「コンピュータ計算」

「コンピュータ」必要ですか？

7)「出現の理解」

リサーチしてください。

J18

1)「可視光」

赤外線 (infrared light) や紫外線 (ultraviolet light) は？

2)「豊かに解き明かし」

「豊かに」と「解き明かし」は呼応していますか？

3)「(戻れない)ものです。」

「ものです」は、この文脈で必要でしょうか。

4)「物質において」「難解な」「挑戦」

誤訳です。

5)「ついて、次に～について。」

省略して簡潔にしたかったのだと思いますが、中途半端な印象が勝ってしまっています。

6)「同じく答えを追求し、」

なにが「同じく」なのかちょっと考えてしまいます。

7)「矛盾」

微妙に誤訳です。

8)「物理学はこれまで、」

ここに「これまで」をつけると、「これから」は何かが変わることを示唆してしまいます。

9)「MRI 検査」

技術の例をあげています。「検査」は「技術」ではないですね。

10)「さらに×さらに」

意味の違う「さらに」ですが、読みにくくなります。

J24

1)「物事」「根拠」

「空の青さ」や「力、運動、重力」などは「物事」でしょうか？またそれらに対し「根拠」は呼応しているでしょうか？

2)「導き出し続ける」

こなれていない表現です。また、似たような意味ですが、原文は「goes on giving」ではなく「goes on to give」です。

3)「それだけで済むものではありません。」

「物理学さん」が怒っているようです。

4)「次に続く」

意味不明です。

5)「超大統一理論」

リサーチしてください。

J45

1)「日常の世界を引き起こす」「全体としての宇宙」「それらの粒子全部をどのようにもたらしたか」「試み」
意味不明です。

2)「不思議さに興味を持てば、」

ここだけ「疑問」を「不思議」に言いかえることで違和感があります。

3)「配列」「星の輝き方」

誤訳です。

4)「その探究は～誘ってきた。」

呼応が苦しいです。こうした呼応を使わなくて済むよう日本語の表現力を磨いてください。

5)「それにまた、」

重複です。

J48

1)「エネルギー」「電磁気」

誤訳です

2)「自然界」

例えば、「おかんが電気の恩恵を享受して、電子レンジで昨日の晩御飯の残りもんをチンしてお昼に食べる」ことも「the everyday world」です。となると「自然界」というワードチョイスは適切でしょうか？

3)「りんご VS 林檎」

統一。

4)「問いかけ」

ワードチョイス自体も少しわかりにくいですし、異なる段落の直接疑問文を指しているの、指示詞が必要かと思えます。

5)「最初の旅」

ここで「旅」という言葉を使うと読者が混乱しそうです。強いて言うなら「目的地」ですね。

6)「宇宙の広がり」「次世代より先」

意味不明です。

7)「そして今は、」

述部と呼応していません。

8)「研究活動における物理学」

「における」の用法が少しずれています。

9)「若い世代×若い世代」

同格で重ねる効果がでていません。

J51

1)「大抵」

不要な挿入です。これを入れただけで誤訳になってしまいます。

2)「それから」

使い方によっては OK もありますが、段落の冒頭でいきなり「それから」はカジュアル過ぎる印象があります。

3)「貴重な」

誤訳です。

4)「そこで終わり」「(人間レベル)の話」

これらもカジュアルに聞こえます。

5)「後には引けない」「星の光」「(研究が行われて)いるため」

意味が少しずれてしまいます。

6)「長い旅路」

ここだけ唐突に journey 関連の言葉をもってきても意味が伝わりません。

7)「において物理学者は同じ場所へ」

意味不明です。

8)「それを証明するかのように」

ここは、原文にないフレーズを追加しなくても十分意味をつないでいけると思います。

第 11 章 終わりに

今回は、直接疑問文や「journey」のモチーフなど、その効果を再生するのが難しい「仕掛け」に、皆さん悩まれたようです。こうした効果を再生する作業は、翻訳者にとって苦しみでもあります。同時にやりがいを感じられる楽しみの要素でもあります(翻訳者＝ド M というわけではありません)。今後こうした「仕掛け」に遭遇しても、翻訳者としてそれを楽しめるように、表現力を磨いてください。そして、呼応をはじめとする日本語の基本表現を推敲することもお忘れなく。

石原ゆかり

今年も新人翻訳コンテストを無事開催でき、大変喜ばしく存じます。受賞者の皆さん、おめでとうございます。応募者、審査員、実行委員の皆さん、本当にお疲れ様でした。

まず課題文についてですが、ここ数年時事関係のものが続いたので、今回は方向を変え、学術色の強いもの、それも理系のものを選んでみました。実務翻訳では本当に多種多様な内容を扱います。実際にこのような学術系団体のホームページの翻訳を依頼されることもあります。他方、私自身もそうですが特に文系出身の中には理系は苦手と言う人も少なくなく、今回 Physics という文字を見ただけでため息をついた方もいらっしゃるかもしれません。

しかし、実際にはとても平易な文章で、身の回りの事象や例を挙げながら生き生きと物理学の魅力が語られています。顕微鏡を覗いていたと思ったら望遠鏡で銀河を見ていたり、はるか昔の人たちが虹を見上げていると思ったら、現代に移って若い学生たちが研究室で研究に励んでいる姿を想像したり、とタイムトラベル的な雰囲気もあって、キラキラ眩しく、わくわくしました。なぜ物理学は大切なのか、なぜ人は物理学を勉強するのか。それ

は古代人が星空を見上げて思いを馳せた時から続く探求の旅。物理学者は探求の旅人なのだ。そして他の人々は旅人たちが見つけてきたものから恩恵を得、さらに発展し続けることができる。だから物理学は大切で、こうした探求の旅人たちを支援するためにこの組織、NSF は存在するのであり、その意義を理解してほしい、というのがこのホームページの主旨です。課題文となった箇所はその概要、第一歩です。このページが魅力的であれば、読者は本文下の各リンクや上のボタンやタブをクリックし、他のページに進んでくれることでしょう。

残念ながら、今回、最終選考に残った作品からはいずれもこの主旨がはっきりとは伝わってきませんでした。うまく訳せている表現もありましたが、ちぐはぐなで全体的に日本語の文章として完成していないという印象を受けました。原文では、journey という線形的な概念を核として、古代と現代、宇宙と粒子、というようにあちこちで対比表現を使い「物理学 = 探求の道」の図式が示されています。この点がきちんと表現しきれておらず、単なる単語、表現の羅列に終わってしまっている文が目立ちました。直訳調の表現が多く、主語と述語のつながり、名詞と代名詞のつながり、また、選択した表現が日本語として意味を成しているか、といった細かい配慮に欠けていました。

文章には何らかの目的があるものです。著者はなぜこの文章を書き、他の人に伝えたいのか。翻訳とは翻訳者が著者の意図を理解して原文とは違う言語に変換する作業です。翻訳者自身が著者の意図をしっかりと理解できていない、もしくは翻訳者自身の意図が入ってしまうと、原文の目的とは異なった文章となってしまいます。1 つ、1 つの単語や表現のみでなく、文、段落、そして文章全体を把握し、忠実に訳すことが大切です。

今回、subatomic、Bose-Einstein condensates、quantum computation といった科学用語を英和辞書で調べることから始めませんでしたか？ これらの用語を「正しく」訳すことはもちろん大事ですが、それはある意味、二の次なのです。たまには、英和辞書は横に置いて英文をとりあえず読んでみることから始めてみてください。分からない単語や表現はとりあえず飛ばし、英語で残すか仮訳をし、前に進む「勇気」も必要です（もちろん、最終的にはきちんと訳してくださいね）。実務では 1 日千語、2 千語の英文をこなしていかなければなりません。1 つ 1 つこだわりすぎていては締め切りまでに完成させることはできません。たとえば、新しい機能や技術の場合、英和辞書に載っている以前に日本語の言葉すらまだ存在していないこともよくあります。また、その国や企業に独特の表現や造語もあります。そのような場合、翻訳者自身がこれら新しい用語の訳を創り出さなければならないこともあります。クライアントが用語集を作成している間に仮訳で翻訳作業を進めなければならないこともあります。文章を訳す上で適切な用語を使用することはもちろん大切ですが、用語という詳細部分のみに注目し過ぎて足元を取られないことがないよう、大要を把握することが大切です。「木を見ずに森を見て」ください。そして、森を見たら木の種類も分かってきます。

けれども、全体で 1 万、10 万語の仕事を引き受け、それを事前にじっくり目を通すことは、正直無理ですし、効率も良くありません。また 1 つの仕事を複数の翻訳者で分業したり、更新版であったりする場合は、原文の一部しかもらえないこともあります。今回のような概要文を担当した場合、詳細部分がもらえないと訳しづらいこともありますが、逆にこの概要から全体像を掴めることもあります。要は与えられた環境で、できる限りの範囲で全力を尽くすことが大事なのです。今、訳している原文自体にヒントがたくさんあることを忘れないでください。

分からない表現だらけなのに、全体像なんて理解できない、とお嘆きの方もいらっしゃるかもしれません。もしくは、意味は分かるのだけど、日本語ではどうやって表現するのか？と悩まれるかもしれません。けれど、本当に分からない表現なののでしょうか？逆に、本当に分かっていると言い切って良いのでしょうか？理解できない表現は、文脈から予想できます。反対に、今回の work のように一般的な言葉なのに、相当する日本語が出てこないというのは、真の意味では分かっているわけではないからかもしれないのです。

原文理解力も表現力も、いずれも「インプット」量を増やすことで向上できます。たとえば今回の physics。すべて単に「物理学」と訳して良いのでしょうか？私は「physics of the tiniest particles」の physics は学問のことではないと思います。まさにこの文章のテーマの、how it is made、how it works ではないのでしょうか。英語では学問の話ではなくても、日常的に何かの仕組みや働き、構成の話をするときに physics of... とか、anatomy of... の表現はよく使います。日本語で「学」が付くとどうしても学問のみに意味が狭まってしまうことが多い点に注目してください。「physics of love」をどう訳しますか？また、「旅路に就く」、「端を発する」などの表現が誤用されているものもありました。いずれも美しい表現だと思いますが、正しく使われていなければ意味がないのです。

翻訳者にとっては「思い込み」は敵です。常に自分の知識を疑い、自己自問を続け、きちんと意味や用法を調べて確認し、さらに新しい、正しい知識を身に付け、理解力、表現力を磨いていってください。その意味では翻訳者も「探求の道」を歩んでいると言えるでしょうか。

次に気になった箇所について簡単に述べます。

J10

大意は掴めているようですが、訳抜け (physical world、give rise to、go on、rich)、原文にない追加 (自身、何とも、辿り着いて)、誤訳 (1 文目の world は「生活」?)、直訳的表現 (命名したおびただしい数) が目立ちました。また、「それらの神秘を探り出そうとする段階まで続きます」、「探求は、...長い旅に誘い」、「物理学がそこで終わる」など、意味が不明で、感覚で訳してしまっているように見受けられる表現が気になりました。「これらの現象」はその前の「...といった... 生活」を受けていると思われましたが、「現象」と「生活」とでは一致していません。原文に忠実となるように丁寧に訳しつつ、日本語の文章として自然な流れを出すことを心がける、それには推敲を繰り返されると良いでしょう。訳文を自分で読み、意味が分からないとか変だな?と思われる箇所はたいてい原文とずれていたり、誤訳であったりするものです。まずは訳者自身が最初のエディターとして見直し作業を行うようにしましょう。

J18

「可視光」、「恒星」は普通に「光」、「星」と言った方が良いです。原文が全体的に平易な文章なので、特に「force, motion, gravity, heat, light, electricity and magnetism」など並列部分など、他の表現とバランスをとるようにしましょう。主語がない (解き明かし)、主語と述語の位置が遠い (探ってしまうのです)、もしくは関係が間違っていたりして、全体的に自然さに欠けた文章になっています。「deep」、「individual」は誤訳されていました。「原子核中」はやや口語的で視覚的にも読みづらいので「原子核内」、「原子核の中」などにする、また、「エネルギー、空間、時間...」の「時間」の前に「そして」など、時間そのものをもう少し強調するなど、ちょっとした工夫で読みやすく

なります。

J24

最終候補作品中、一番素直に読むことができました。特に「Physics goes on to give us many answers—」とコロナ以下の部分の関係、それから対比箇所など、原文の意味、感覚がきちんと再現されていました。でも、日本語の表現力についてまだまだ細かい配慮が必要です。「彩る」とは原文では言っていない。「機能する」は主語と呼応しておらず、「続けるのが」(誤訳)、「など物質の示す性質の根拠」(意味不明)、「日常社会」、「済むものでは」、「立役者」(これは NSF のホームページなので自身を誉めるような表現はおかしい) などが気になりました。「森を見る」ことができているので、木や枝葉部分にも気を配るようにするとプロの道にさらに一歩近づけるでしょう。

J45

「誘ってきた」、「それらの粒子全部をどのようにもたらしたか」、「目の回るような」、「個人」、「なぜこのようになるのか」など、意味が不明、もしくは文脈とそぐわない表現が目立ちました。「量子」と「量子化」は同義でしょうか？文脈から判断して辞書の中から当てはまる表現を選択するのみでなく、選択した訳語や表現を訳文に含めた後、その意味が分かるか自問して確認する、きちんと自分の言葉で言い換える練習を重ねてください。辞書に載っている表現そのものでなくても良いのです。「相反する方向へ向かったはずの旅」は確かに補足で分かりやすくなりましたが、原文にはないので、原文に忠実、かつ、この意味が出せるようにすると良いでしょう。訳した文を原文と比較して、漏れや不要な補足はないか、原文が正確に訳出されているか確認してください。「課題分」はスペルミスですよ？「概要」のスペースは原文になく不要です。減点ではありませんが、この文章は物理学やこの団体の親しみやすさを強調するために書かれているので、常体よりも敬体の方が柔らかく、好まれるかもしれません。

J48

「自然界」、「幅広く」、「答えが出たら終わるもの」、「くれました」、「成果」など、原文の意味をあまり深く考えずに表現が選択されているのが気になりました。「正しく理解するための」、「根本となる普遍的な法則はどこにあるのか...」のあたりは、もう少し前後のつながりを示すと流れがよくなると思います。

「unifying」、「次世代より先の」のあたりは誤訳になっていました。「問いかけに対する答えの探究」は、どの問いかけなのかが示されておらず、唐突な印象を受けました。「...クォークやグルオン、レプトンなどと物理学者によって名付けられた」は「物理学者によって」のところで流れが悪くなっています。なくてもよいのではないのでしょうか。素粒子物理学と宇宙全体、137 億年前のビッグバンにより宇宙が誕生した経緯の部分は、並列が不自然です。「brought it all into」の all が抜けています。「MRI(磁気共鳴画像法)」は原文にはない補足です。名称などの補足は親切な場合もありますが、MRI などは日本でも定着しているので不要かもしれません。最後の段落の 1 文目は、「アメリカ国立科学財団は...」を文頭に置いた方が分かりやすいです。「助成」は金銭的な援助を指すことが普通ですが、ここでは金銭的な援助とは限らないので単に「支援」ぐらいにしておいた方が無難です。

J51

ところどころ良い表現が多く、好感を持ちましたが、それぞれのつながりが不自然で、焦点がぼやけてしまい、惜

しくも 2 位です。「研究の対象となっています」、「それを証明するかのよう」、「間違いありません」、「支えなのです」、「貴重な記述」など、原文の伝えようとしている意味から外れてしまっています。原文の内容や用語に関する自分自身の理解に頼らず、原文の意味を素直に自分の言葉で表現するよう心がけてください。残念だったのは、inward と outward 部分の対比です。意味を掴んで「マイクロとマクロ」という表現に置き換えるという高度な処理がなされていますが、対比が文章全体で徹底しきれておらず、せつかくの「マイクロとマクロ」の効果が薄れています。inward の方では「長きに渡って・・・行ってきた」と、せつかくご自身の言葉に変えて表現しているのに、outward では「長い旅路に就いてきた」と原文そのまま対比がぼやけてしまっています。あと、ここは「長い探求の道、旅」が 1 本 (または何本もあるのかもかもしれませんが)、「線形」であるのに対し、「就いてきた」という、「点」の表現を使用しているあたり、「旅路」だから単に「就く」とするのではなく、もう少し配慮が欲しかったです。「において」、「両方とも」というところを強調して欲しいところなのに抜けてしまっています。それから、原文では探求という「線」、「奥行き」的な感覚を表すために「deepest」としているのに「面」という平面的な表現に変えてしまっているところは、「マイクロとマクロ」の言い換えができる方であっただけに、もうひと押し欲しかったです。それから減点にはしていませんが、この分野では micro は「ミクロ」の表記の方が一般的です (映画「ミクロの決死圏」のように)。また審査員の間では好評だったんですが、訳文再利用などの事情もあり、クライアントやエディターによっては一般的でない訳はあまり好まれないことがあります。あるいは言語や翻訳にそんなに詳しくない人を見ることもあり、誤訳と判断されてしまう恐れも多少あります。それではつまらないと思われるかもしれませんが素直に無難な訳を選ぶのも実務翻訳のテクニックの 1 つです。「恩恵」は NSF 組織自体の文章なので自身のことを誉めるような文章は好ましくありません。courtesy of は「の好意により」と訳されていますが、「好意かどうか」は不明です。主観的な表現は避け、「提供」というような客観的な表現の方が安全です。それから原文は疑問形が多く、たたみかけるような語調ですが、疑問形を避けていらっしゃいました。それはそれですっきりしていて良かったし、通常は確かに疑問形をそのまま疑問形で訳すと直訳的、やや幼稚と取られることも多いので推奨されるテクニックなのですが、今回の場合、物理学とは探求であるということが主旨なので、あえて疑問形を残した方が効果的であったかもしれません。

最後に補足コメントです。

- radio は単数形なので無線通信のことだと思いますが、「ラジオ」と日本語では機械のラジオのイメージが強いので気をつけましょう。
- 語句とその省略形の表記が統一していない作品がありました。
- 訳文内の英語、特に省略形の表記を全角か半角か、文章内で統一させてください。一般には全角よりも半角の方が好まれる傾向にあります。クライアントにもよります。
- 本文下のリンク先タイトル名ですが、このようなリンク先、参照先のタイトルを訳すことは実際の仕事では良くあります。リンク先、参照先のページを確認できる場合は、実際のページや参照先の内容を読んでからタイトルを決めます。ただし、環境や作業手順などによっては、翻訳者の納品後、後工程で実際のタイトル名と差し替えたり、製版時やユーザーが使用する時点で自動的に挿入されるので訳が不要であったりすることもあります。たいてい、どのように処理すべきかクライアントから指示がありますが、ない場合は翻訳者の方から事前に確認するようにしましょう。無駄な作業や作業中の質問を避けることができ効率的であるのみでなく、あとで報酬対象外とされてしまうなどのトラブルにつながることもありません。

- 斜体は日本語では読みづらいので、特にクライアントからの指示がない場合は避けるようにしましょう。でも、最近 HTML、XML など書式がタグで指定されるため、翻訳者が特に変更する必要もないこともあるので、不明な場合は事前にクライアントに確認してください。
- 引用符は日本語ではあまり定着していませんが、クライアント側でいろいろ事情もあるので、指示に従いましょう。

いろいろと苦言を呈しましたが、プロの世界では苦言であれ、フィードバックがもらえるのはありがたいことです。どうぞ、厳しい言葉の陰に暖かい激励の気持ちがあるとご理解いただき、今後もさらにスキル向上を目指してがんばってください。また今回、受賞を逃した方、次回もぜひ挑戦してください！